広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝文人傳 ： 『周書』王褒傳
Author(s)	森野, 繁夫
Citation	中國中世文學研究 , 53 : 1 - 19
Issue Date	2008-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051398
Right	
Relation	

六朝文人傳 ―『周書』王褒傳―

森野繁夫

『六朝文人傳』下巻には、齊の謝朓、梁の沈約、任昉、江淹、劉孝綽、北周の庾信、王褒、陳の徐陵の傳を収めることにしている。この度は北周の王褒を採りあげた。傳の内容は次のようになっている。

（1）家系　（2）幼少時、起家より侯景の亂まで
（3）元帝に仕える　（4）建業歸還を主張
（5）江陵陥落　（6）西魏の臣となる
（7）北周に仕える　（8）周弘讓への手紙
（9）周弘讓からの復書

（1）家系

王褒、字子淵、琅邪臨沂人也。曾祖儉、齊侍中、太尉、南昌文憲公。祖騫、梁侍中、金紫光祿大夫、南昌安侯。父規、梁侍中、左民尚書、南昌章侯。並有重名於江左。

王褒、字は子淵、琅邪は臨沂の人なり。曾祖は儉、齊の侍中、太尉、南昌文憲公。祖は騫、梁の侍中、金紫光祿大夫、南昌安侯。父は規、梁の侍中、左民尚書、南昌章侯。並びに江左に重き名有り。

【語釈】

［王褒］五一三？～五七六？、『梁書』巻四一、『北史』巻八三に傳がある。

［儉］王儉（四五二～四八九）字は仲寶。『南齊書』巻二三、『南史』巻二二に傳がある。

［騫］王騫（四七四～五二二）字は思寂。『南史』巻二二に傳がある。

［規］王規（四九二～五三六）字は威明。『梁書』巻四一、『南史』巻二二に傳がある。

【訳】

王褒、字は子淵、琅邪は臨沂の人。曾祖は儉で、齊の侍中、太尉、南昌文憲公。祖は騫で、梁の侍中、金紫光祿大夫、南昌安侯。父は規で、梁の侍中、左民尚書、南昌章侯。並びに江左に重き名が有った。

（2）幼少時、起家より侯景の亂まで

襃識量淵通、志懷沈靜。美風儀、善談笑。博覧史傳、尤工屬文。梁國子祭酒蕭子雲、襃之姑夫也。特善草隸。襃少以姻戚、去來其家、遂相模範。俄而名亞子雲、並見重於世。梁武帝喜其才藝、遂以弟鄱陽王恢之女妻之。

起家祕書郎、轉太子舍人、襲爵南昌縣侯。稍遷祕書丞。宣成王大器、簡文帝之冢嫡、即襃之姑子也。于時盛選僚佐、乃以襃爲文學。尋遷安成郡守。及侯景渡江、建業擾亂、襃輯寧所部、見稱於時。

襃は識量 淵通、志懷 沈靜なり。風儀 美しく、談笑を善くす。史傳を博覧し、尤け屬文に工みなり。梁の國子祭酒 蕭子雲は、襃の姑夫なり。特に草隸を善くす。襃は少きとき 姻戚なるを以て、其の家に去來し、遂に相模範とす。俄かにして名は子雲に亞ぎ、並びに世に重んぜらる。梁の武帝は其の才藝を喜し、遂て弟鄱陽王恢の女を以て之に妻す。

起家して祕書郎となり、太子舍人に轉じ、爵を南昌縣侯に襲ふ。稍ありて祕書丞に遷る。宣成王大器は、簡文帝の冢嫡にして、即ち襃の姑子なり。時に盛んに僚佐を選び、乃ち襃を以て文學と爲す。尋で安成郡守に遷る。侯景 江を渡り、建業 擾亂するに及び、襃は所部を輯め寧んじて、時に稱せらる。

【語釈】

［識量淵通］「淵」字、『北史』文苑（王襃）傳では「淹」に作る。「識量」は、学識と度量。「淵通」は、深く且つ廣いこと。

［志懷沈靜］心のうちは沈着冷静であった。

［尤工屬文］詩文を作るのが巧みであった。

［蕭子雲］四八六～五四八。字は景喬。『梁書』巻三〇に傳がある。本傳には「子雲は草隸の書を善くし、世の楷法と爲る」とある。しかし『晉書』王羲之傳の「制」には、唐の太宗の評として「行行 春の蚓を巡らすが若く、字字 秋の蛇を綰らすが如し」とある。

［宣成王大器］「成」字、『北史』本傳は「城」に作る。「大器」は、簡文帝蕭綱の長子。

［文學］『南齊書』一六「百官志」に「諸王には、師、友、文學、各一人」とある。

［安成郡守］「成」字、『北史』『梁書』では「城」に作る。

［侯景渡江、建業擾亂］侯景は太清二年（五四八）八月に亂を起こし、十月に建康の台城を包囲。翌年三月、台城は陥落す。

【訳】

襃は學識 度量が淵通で、志懷は沈靜。風采は美しく、談笑を善くした。博く史傳を讀んでおり、尤け詩文に巧みであった。梁の國子祭酒 蕭子雲は、襃の父方の叔母の夫であり、特に草書 隸書を善くした。襃は姻戚ということで年少の頃から、子雲の家に出入りし、その書法を模

範とするようになった。ほどなく其の名は子雲に亜ぐほどになり、並びに世に重んぜられた。梁の武帝は彼の才藝を認めて、弟の鄱陽王蕭恢の娘を褒に妻せた。

起家して祕書郎となり、太子舍人に轉じ、南昌縣侯の爵位を継いだ。しばらくして祕書丞に遷った。宣成王蕭大器は、簡文帝の嫡男であり、即ち褒の父方の叔母の子であった。そのころ盛んに僚佐を選んでおり、褒を選んで文學とした。やがて安成郡守に遷った。侯景が亂を起こして江を渡り、都の建業が擾亂に陥ると、褒は担当の部署を纏め治めて、その能力を讃えられた。

(3) 元帝に仕える

梁元帝承制、轉智武將軍、南平内史。及嗣位於江陵、欲待褒以不次之位。褒時猶在郡、敕王僧辯、以禮發遣。褒乃將家西上。

元帝與褒有舊、相得甚歡。拜侍中、累遷吏部尚書、左僕射。褒既世冑名家、文學優贍、當時咸相推挹。故旬月之間、位升端右。寵遇日隆、而褒愈自謙虛、不以位地矜人、時論稱之。

梁の元帝 制を承くるや、智武將軍、南平内史に轉ず。位を江陵に嗣ぐに及び、褒を待するに不次の位を以てせんと欲す。褒は時に猶ほ郡に在れば、王僧辯に敕して、禮を以て發遣せしむ。褒は乃ち家を將て西上す。

元帝は褒と舊有れば、相得て甚だ歡ぶ。侍中に拜せられ、吏部尚書、左僕射に累遷す。褒は既に世冑の名家にして、文學 優贍なれば、當時 咸な相推挹す。故に旬月の間に、位は端右に升る。寵遇は日に隆んなるも、而も褒は愈よ自ら謙虛にし、位地を以て人に矜らざれば、時論 之を稱す。

【語釈】

[梁元帝承制]「元帝」は、湘東王蕭繹、字は世誠（武帝の第七子）。太清三年（五四九）、侯景軍に制圧された臺城内の簡文帝からの密詔により、承制の任に就いた。

[智武將軍]『梁書』本傳では「忠武將軍」となっている。

[及嗣位於江陵] 湘東王蕭繹は侯景を討伐した後、承聖元年（五五二）十一月に江陵で帝位に即いた。

[不次之位] 昇進が順序通りでない高い官位。

[王僧辯] ?～五五五。元帝の下で侯景の亂平定に功績があった。後に陳霸先と意見が合わず、霸先に殺される。

[左僕射]『梁書』本傳によれば、元帝の承聖二年に尚書右僕射に遷り、同年中に左僕射となっている。

[世冑名家]「世冑」は、代々續いた名門の子孫。

[位升端右]「端右」は、尚書省の長官。

【訳】

梁の湘東王（元帝）が政権を承け継ぐと、褒は智武將軍、南平郡内史に轉じた。王が江陵で帝位に即くと、褒を不次の位を以て待遇しようとした。褒はその時まだ南平郡にいたので、王僧辯に敕し、禮を以て使者を遣した。

襃はそこで家族を連れて西上した。

元帝は襃と昔馴染みであったので、襃を得て甚だ歡んだ。襃は侍中に拜せられ、吏部尚書、左僕射に累遷した。襃は代々續いた名家の出であるし、文學の才も豊かであったので、人々は咸な彼を推薦した。ために旬月の間に位は尚書省の長官にまで升った。帝の寵遇は日ましに隆んになったが、しかし襃は愈よ謙虚であり、その地位を以て人に矜ることがなかったので、時論の評価は高かった。

(4) 建業歸還を主張

初、元帝平侯景、及擒武陵王紀之後、以建業彫殘、方須修復、江陵殷盛、便欲安之。又其故府臣寮、皆楚人也、並願即都荊郢。

嘗召羣臣議之。領軍將軍胡僧祐、吏部尚書宗懍、太府卿黄羅漢、御史中丞劉毅等曰、

「建業雖是舊都、王氣已盡。且與北寇鄰接、止隔一江。若有不虞、悔無及矣。臣等又嘗聞之、荊南之地、有天子氣。今陛下龍飛纘業、其應斯乎。天時人事、徵祥如此。臣等所見、遷徙非宜。」

元帝深以爲然。

時襃及尚書周弘正咸侍座。乃顧謂襃等曰、

「卿意以爲何如。」

襃性謹慎、知元帝多猜忌、弗敢公言其非。當時唯唯而已。後因清閒密諫、言辭甚切。元帝頗納之。然其意好荊楚、已從僧祐等策。

明日、乃於衆中謂襃曰、

「卿昨日勸還建業、不爲無理。」

襃以宣室之言、豈宜顯之於衆。知其計之不用也、於是止不復言。

初め、元帝侯景を平げ、及び武陵王紀を擒にするの後、建業の彫殘して、方に修復す須く、江陵の殷盛なるを以て、便ち之に安んぜんと欲す。又た其の故府の臣寮は、皆な楚人なれば、並びに即ち荊郢に都せんことを願ふ。

嘗て羣臣を召して之を議せしむ。領軍將軍胡僧祐、吏部尚書宗懍、太府卿黄羅漢、御史中丞劉毅ら曰く、

「建業は是れ舊都と雖も、王氣已に盡く。且つ北寇と鄰接し、止だ一江を隔つるのみ。若し不虞なること有らば、悔ゆるとも及ぶ無し。臣ら又た嘗て之を聞く、荊南の地に、天子の氣有りと。今 陛下の龍飛して業を纘ぐは、其の應 斯なる乎。天時 人事、徵祥 此の如し。臣等の見る所、遷徙は宜しきに非ず」と。

元帝 深く以て然りと爲す。

時に襃及び尚書周弘正 咸な座に侍す。乃ち顧みて襃らに謂ひて曰く、

「卿の意 以て何如と爲す」と。

襃は性 謹慎にして、元帝の猜忌多きを知れば、敢へて其

の非を公言せず。時に當りて唯唯たるのみ。
後に清閒に因りて密かに諫め、言辭 甚だ切なり。元帝頗る之を納る。然れども其の意は荊楚を好み、已に僧祐らの策に從ふ。明くる日、乃ち衆中に於て褒に謂ひて曰く、
「卿の昨日 建業に還るを勸むは、理無しとは爲さず」と。
褒は以へらく 宣室の言、豈に宜しく之を衆に顯かにすべけんやと。其の計の用ひられざるを知るや、是に於て止めて復た言はず。

【語釈】
［擒武陵王紀］「武陵王紀」は、武帝の第八子。武帝が亡くなると蜀地において帝を稱し、湘東王（元帝）に對抗したが、破れて殺された。『梁書』巻五五。『南史』巻五三。
［故府臣寮］江陵に在った湘東王府の幕僚。
［王氣］天子を生み出す運氣があること。
［北寇］北にある異民族国家、ここは北齊、北周をいう。
［尚書周弘正］四九六～五七四。王褒の親友である周弘讓の兄。江陵を都とすることに強く反對したが認められなかった。
［宣室］天子の居室。

【訳】
その初め、元帝は侯景の亂を平げ、また武陵王蕭紀を擒にした後、建業の都は荒廃して、修復が必要な狀態であり、それに對して江陵は殷盛であったので、そこで江陵を都にしようと思った。又た其の故府（湘東王府）の臣僚たちは、皆な楚地の人であったので、いずれも荊郢の地を都にすることを願っていた。
帝は嘗て羣臣を召してこのことを議論させたことがあった。領軍將軍胡僧祐、吏部尚書宗懍、太府卿黄羅漢、御史中丞劉毅らが言うには、
「建業は舊都ではあっても、王氣はもはや盡きております。そのうえ北寇と鄰接しており、止だ一江を隔てるだけです。若し不測の事態の起るようなことがあったら、後で後悔しても及びません。臣らは又た次のようなことを聞いたことがあります。「荊南の地には、天子の氣が有る」と。今 陛下が龍飛して王業を纘がれたのは、其の証拠ではないでしょうか。天の時と人事に、このような吉兆が現れているのです。臣等の見る所では、建康へ遷徙るのは良くありません」と。
元帝は確かにその通りだと思った。
その時、王褒と尚書周弘正は其の座に侍していた。帝は振り返って褒らに謂うには、
「卿はどのように思うかな」と。
褒は謹慎なる性格であり、また元帝が猜疑心の強い人であることを知っていたので、それが好くないことを敢えて公言しないで、その場は適當に返事をするだけにしていた。
後に帝の傍に人のいない時に密かに諫めたが、その言辭は甚だ切實なものであった。元帝はその考えに頗る同

意した。しかしながら其の心のうちは荊楚の地を好んでおり、已に僧祐らの策に従うつもりであった。

明くる日、帝は皆のいるところで褒に謂うには、「卿が昨日 建業に還ることを勸めたのは、道理の無いことではない」と。

褒はその言葉を聞いて、「天子の居室での話を、衆に顯かにしてよいものであろうか」と思い、自分の計が用いられないことを知って主張することを止め、それ以上は何も言はなかった。

(5) 江陵陥落

及大軍征江陵、元帝授褒都督城西諸軍事。褒本以文雅見知、一旦委以總戎、深自勉勵、盡忠勤之節。被圍之後、上下猜懼。元帝唯於褒深相委信。朱買臣率衆出宣陽之西門、與王師戰、買臣大敗。褒督進不能禁、乃貶爲護軍將軍。

王師攻其外柵、城陷。褒從元帝入子城、猶欲固守。俄而元帝出降、褒遂與衆俱出。見柱國于謹、謹甚禮之。

褒曾作燕歌行、妙盡關塞寒苦之狀。元帝及諸文士並和之、而競爲淒切之詞。至此方驗焉。

大軍 江陵を征するに及び、元帝は褒に都督城西諸軍事を授く。褒は本と文雅を以て知らるるも、一旦 委ねらるるに戎を總ぶるを以てすれば、深く自ら勉勵し、忠勤の節を盡す。圍まるるの後、上下 猜懼す。元帝は唯だ褒に於て深く相い委信す。朱買臣は衆を率ゐて宣陽の西門を出でて、王師と戰ひ、買臣 大敗す。褒は督進にして禁ずる能はざれば、乃ち貶されて護軍將軍と爲る。

王師 其の外柵を攻め、城陷つ。褒は元帝に從ひて子城に入り、猶ほ固守せんと欲す。俄かにして元帝出でて降れば、褒は遂に衆と俱に出づ。柱國于謹に見ゆるに、謹は甚だ之に禮す。

褒は曾て「燕歌行」を作り、妙に關塞 寒苦の狀を盡す。元帝及び諸文士 並びに之に和し、而して競ひて淒切の詞を爲す。此に至りて方に驗あるなり。

【語釈】

[及大軍征江陵] 承聖三年十月、柱國于謹の率いる西魏の大軍が江陵に侵攻した。

[都督城西諸軍事] 城西担当の司令官。『梁書』元帝紀には「領軍胡僧祐を以て城東・城北の諸軍事を都督せしめ、左僕射王褒をして城西・城南の諸軍事を都督せしむ」とある。

[朱買臣率衆出宣陽之西門] 「朱買臣」は元帝に仕えていた宦官。「宣陽之西門」は、『梁書』元帝紀に「反する者、西門の關を斬りて以て魏師を納れ、城は西魏に陥つ」とある「西門」のことであろう。

[褒督進不能禁、乃貶爲護軍將軍] 城西を担当していた王褒が、朱買臣の出撃を禁ずることができなかったというので、護軍將軍に降格された。

［俄而元帝出降］『周書』于謹傳によれば、西魏軍は十六日間の攻撃で江陵の外城を落し、子城に退避した元帝は翌日、城を出て降伏した。

［柱國于謹］「于謹」（四九三～五六八）保定二年（五六二）江陵占領の勲功によって、使持節、柱国大將軍、太保となり建平郡公を贈られている。『周書』巻一五。『北史』巻二三。

［褒曾作燕歌行、妙盡關塞寒苦之狀］「燕歌行」は、北地への行役に出たまま歸ってこない夫の身の上を案ずる妻の情を詠った樂府詩。

［元帝及諸文士並和之］この時に詠われた「燕歌行」のうち、元帝と庾信の作品が現存している。

【訳】

（西魏の）大軍が江陵を征伐するに及び、元帝は褒に都督城西諸軍事を授けた。褒は本來 文雅を以て知られていたが、一旦 軍隊を總べる任を委ねられると、深く自ら勉勵して、忠節を盡した。西魏軍に圍まれた後、城中の上下たがいに敵軍との内通を猜がい懼れた。しかし元帝は唯だ褒については深く信頼していた。そのようなとき朱買臣は兵衆を率ゐて宣陽の西門を出て、王師（西魏軍）と戰って大敗した。褒は督進の任にありながら買臣の出撃を止めることができなかったことで、護軍將軍に貶された。

王師（西魏軍）が其の外柵を攻め、城は陷ちた。褒は元帝に從って子城に入り、猶も固守せんとした。ところが俄かに元帝が城を出て降參したので、それで褒は衆と俱に城を出た。柱國于謹に會ったが、謹は甚だ鄭重に褒を禮遇した。

褒は曾て「燕歌行」を作り、關塞寒苦の狀を巧みに詠じた。元帝及び諸文士は並びにそれに和し、競って淒切の詞を爲したが、此に至って方にそれが現實となった。

（6）西魏の臣となる

褒與王克、劉穀、宗懍、殷不害等數十人、俱至長安。太祖喜曰、

「昔平呉之利、二陸而已。今定楚之功、羣賢畢至。可謂過之矣。」

又謂褒及王克曰、

「吾即王氏甥也。卿等並吾之舅氏。當以親戚爲情、勿以去鄉介意。」

於是授褒及克、殷不害等車騎大將軍、儀同三司。常從容上席、資餼甚厚。褒等亦並荷恩眄、忘其羈旅焉。

褒は王克、劉穀、宗懍、殷不害ら數十人と、俱に長安に至る。太祖 喜びて曰く、

「昔 呉を平ぐるの利は、二陸のみ。今 楚を定むるの功、羣賢 畢く至る。之に過ぎたりと謂ふべし」と。

又た褒及び王克に謂ひて曰く、

「吾は即ち王氏の甥なり。卿らは並びに吾の舅氏。當に

親戚を以て情と爲し、鄉を去るを以て意に介する勿れ」と。

是に於て褒及び克、殷不害らに車騎大將軍、儀同三司を授く。常に上席を從容め、資餼甚だ厚し。褒らも亦た並びに恩眄を荷ひ、其の羈旅を忘る焉。

【語釈】

［王克］侯景の亂の際に其の侍中、錄尚書事となり、亂後に元帝に仕えて尚書右僕射となる。周の車騎大將軍、儀同三司。後に陳の尚書右僕射となる。『南史』巻二三

［劉穀］梁の湘東王蕭繹の記室參軍、さらに中記室を經て、吏部尚書・国子祭酒となった。『梁書』巻四一。

［宗懍］湘東王蕭繹の荊州別駕、後に吏部尚書となる。周では車騎大將軍となる。また王褒らと麟趾殿で羣書を刊定した。『梁書』巻四一、『北史』巻七〇。

［殷不害］梁の太清の初に平北府諮議參軍・東宮通事舍人となり、簡文帝に仕えた。元帝の中書郎、兼廷尉卿となる。周では車騎大將軍、儀同三司となり、周から歸ると陳の司農卿、尋いで光禄大夫に遷り、次の年に晉陵太守となる。『陳書』巻三二、『南史』巻七四。

［俱至長安］梁の承聖三年（五五四）のことであった。

［太祖］？～五五六。周の文帝、宇文泰。この時はまだ西魏の相であった。

［昔平呉之利、二陸而已］かつて晉が呉を平定して、陸機、陸雲兄弟を長安に呼び寄せたことと比較している。『晉書』陸機傳に張華の言葉として「呉を伐つの役、利は二俊を獲たり」とある。

［吾即王氏甥也］『周書』巻一〇によれば、太祖の母は樂浪の王氏で、琅邪の王氏ではないが、同じ王氏であるのでこのように言った。

［資餼］食糧などの贈り物。

［恩眄］恩恵と引き立て。

【訳】

褒は王克、劉穀、宗懍、殷不害ら數十人と、俱に長安に至った。太祖は喜んで言った、

「その昔 晉が呉を平定した時の利は、二陸だけであった。この度 楚を平定した功として、羣賢が畢くやってきた。昔に過ぎたと謂ふべきだな」と。

又た褒及び王克に謂うには、

「吾は即ち王氏の甥だ。したがって卿たちは並びに吾の舅氏だ。親戚のつもりで暮らし、故鄉を去ったことを意に介することはない」と。

こうして褒及び克、殷不害らに車騎大將軍、儀同三司を授けた。宴席などでは常に上席を從容め、食糧などを沢山に贈られた。褒らも亦た並びに恩眄を承けて、異国に在る思いを忘れた。

（7）北周に仕える

孝閔帝踐阼、封石泉縣子、邑三百戸。世宗即位、篤好文學。時褒與庾信、才名最高、特加親待。帝每遊宴、

命褒等賦詩談論、常在左右。尋加開府儀同三司。保定中、除内史中大夫。高祖作象經、令褒注之。引據該洽、甚見稱賞。

褒有器局、雅識治體。既累世在江東爲宰輔、高祖亦以此重之。建德以後、頗參朝議。凡大詔冊、皆令褒具草。東宮既建、授太子少保、遷小司空、仍掌綸誥。乘輿行幸、褒常侍從。

孝閔帝踐阼し、石泉縣子、邑三百戸に封ぜらる。世宗即位するや、篤く文學を好む。時に褒は庾信と、才名最も高く、特に親待を加へらる。帝は遊宴する毎に、褒らに命じて詩を賦し談論せしめ、常に左右に在り。尋で開府儀同三司を加へらる。保定中、内史中大夫に除せらる。高祖 象經を作るや、褒をして之に注せしむ。引據該洽にして、甚だ稱賞さる。

褒に器局有り、雅より治體を識る。既に累世 江東に在りて宰輔爲れば、高祖も亦た此を以て之を重んず。建德以後、頗る朝議に參ず。凡そ大詔冊は、皆な褒をして具草せしむ。東宮 既に建ちて、太子少保を授けられ、小司空に遷り、仍ほ綸誥を掌る。乘輿 行幸すれば、褒は常に侍從す。

【語釈】

［孝閔帝］五五六～五五七在位。宇文覺。宇文泰の第三子。西魏の恭帝の三年（五五六）十二月に帝位を譲られた。『周書』巻三。『北史』巻九。

［世宗即位］周の明帝。宇文毓。宇文泰の長子。五五七～五六〇在位。

［保定中］「保定」は武帝（宇文邕）の年号で、五六一～五六五。

［高祖作象經］「高祖」は、周の武帝。宇文邕。太祖の第四子。五六〇～五七八在位。「象經」は、博戯（双六の類）の打ち方を解説した書。庾信に「象戯賦」がある。

［引據該洽］「象經」の内容を説明するために引用された典據が、廣く行き渡っていた。

［褒有器局、雅識治體］「器局」は、才能と度量。「治體」は、政治の基本、進め方。

［建德］武帝の年号。五七二～五七七。

［大詔冊］詔勅などの文章。

［綸誥］詔勅の文章。

【訳】

孝閔帝が即位し、石泉縣子、邑三百戸に封ぜられた。明帝が即位すると、篤く文學を好んだ。時に褒は庾信と文才名聲が最も高く、特に親待を加へられた。帝は遊宴する毎に、褒らに命じて詩を賦し談論させて、常に左右に置いた。やがて開府儀同三司を加へられた。保定中には、内史中大夫に除せられた。高祖が『象經』を作ると、褒にその注釈を作らせた。引據は廣く備わっており、甚だ稱賞された。

褒には才能と度量が有り、雅より政治に通じていた。既に何代も 江東に在って宰相を勤めていたので、高祖も

亦たそのことで褒を重んじていた。建德になった後は、しばしば朝廷の政議に加わった。詔勅などの文章は皆な褒に起草させた。太子が立つと、太子少保を授けられ、小司空に遷ったが、引き續き詔勅の起草を掌った。帝が輿に乘って行幸される時には、褒は常に侍從した。

(8) 周弘讓への手紙

初褒與梁處士汝南周弘讓相善。及弘讓兄弘正自陳來聘、高祖許褒等通親知音問。褒贈弘讓詩、并致書曰、嗣宗窮途、楊朱歧路。征蓬長逝、流水不歸。舒慘殊方、炎涼異節。木皮春厚、桂樹冬榮。想攝衛惟宜、動靜多豫。賢兄入關、敬承款曲、猶依杜陵之水、尚保池陽之田、鏟迹幽蹊、銷聲穹谷。何期愉樂、幸甚幸甚。弟昔因多疾、亟覽九仙之方。晩涉世途、常懷五嶽之舉。同夫關令、物色異人、譬彼客卿、服膺高士。上經説道、屢聽玄牝之談、中藥養神、每稟丹沙之説。頃年事遒盡、容髪衰謝。芸其黄矣、零落無時。還念生涯、繁憂總集。視陰愒日、猶趙孟之徂年、負杖行吟、同劉琨之積慘。河陽北臨、空思鞏縣、霸陵南望、還見長安。所冀書生之魂、來依舊壤、射聲之鬼、無恨他鄕。白雲在天、長離別矣。會見之期、邈無日矣。援筆攬紙、龍鍾横集。

初め褒は梁の處士なる汝南の周弘讓と相善し。弘讓の兄弘正 陳より來聘するに及び、高祖は褒らに親知に音問を通ずるを許す。褒は弘讓に詩を贈り、并せて書を致して曰く、

嗣宗に窮途あり、楊朱に歧路あり。征蓬 長く逝き、流水は歸らず。舒と慘と 方を殊にし、炎と涼と 節を異にす。木皮は春に厚く、桂樹は冬に榮く。想ふに攝衛惟れ宜しく、動靜 豫び多からん。

賢兄 關に入り、敬んで款曲を承るに、猶ほ杜陵の水に依り、尚ほ池陽の田を保ち、迹を幽蹊に鏟り、聲を穹谷に銷すと。何ぞ愉樂を期する、幸甚。幸甚。

弟は昔 疾多きに因り、亟ば九仙の方を覽る。晩に世途に涉るも、常に五嶽の舉を懷く。夫の關令に同じく、異人を物色し、譬へば彼の客卿のごとく、高士に服膺す。上經の説道に、屢ば玄牝の談を聽き、中藥もて神を養ひ、毎に丹沙の説を稟く。頃 年事 遒盡し、容髪 衰謝す。芸として其れ黄み、零落 時無からん。

還りて生涯を念ふに、繁憂 總て集まる。陰を視 日に愒ふこと、猶ほ趙孟の徂年のごとく、杖を負みて行く吟ずること、劉琨の積慘に同じ。河陽に北に臨みて、空しく鞏縣を思ひ、霸陵に南望して、還も長安を見る。冀ふ所は書生の魂、來りて舊壤に依り、射聲の鬼、他鄕に恨む無からんことを。

白雲 天に在り、長く離別す。會見の期、邈として日無からん。筆を援り紙を攬るに、龍鍾 横集す。

【語釈】

［周弘讓］周弘正の弟。『南史』巻三四、周朗傳に見える。

［弘讓兄弘正自陳來聘］陳が弘正を北周に派遣したのは天嘉元年（五六〇）のことであり、この間に、北周に拘留されていた陳の安成王頊（後の宣帝）の帰国が許された。弘正が安成王に随って帰国したのは天嘉三年のことであった。

［高祖許褒等通親知音問］高祖は王褒らに、親しい知人たちへ便りを書くことを許した。

［褒贈弘讓詩］王褒の此の詩は、『類聚』巻三六、『文苑英華』巻二三〇に収める「贈周處士詩」のことであろう。

我行無歳月　征馬屢盤桓
嶠曲三危岨　關重九折難
猶持漢使節　尚服楚臣冠
巣禽疑上幕　驚羽畏虚彈
飛蓬去不已　客思漸無端
壯志與時歇　生年隨事闌
百齢悲促命　數刻念餘歡
雲生隴坻黒　桑疎薊北寒

我が行に歳月無く　征馬屢ば盤桓す
嶠は曲り三危は岨しく　關は九折の難を重ぬ
猶ほ漢使の節を持し　尚ほ楚臣の冠を服す
巣禽は上幕を疑ひ　驚羽は虚彈をも畏る
飛蓬去りて已まず（「蓬」一作「鴻」）　客思漸く端無し（「思」一作「念」）
壯志は時と與に歇き　生年は事に隨ひて闌なり
百齢促命を悲しみ　數刻餘歡を念ふ
雲は隴坻の黒きに生じ　桑は薊北の寒きに疎なり

鳥道無蹊徑　清漢有波瀾
思君化羽翮　要我鑄金丹

鳥道に蹊徑無く　清漢に波瀾有り（「漢」類聚作「溪」）
君の羽翮に化するを思ふ　我に金丹を鑄せんことを要む

私の旅路は何時終わることやら
征馬はしばしば盤桓る
嶠山の路は曲がりくねり三危の山は岨しく
關所では九折の難を重ねた」
それでも猶お漢使の節を持ち
尚お楚臣の冠を服していた
巣作りをする禽は幕の上に作っているのではと疑ひ
びくついている羽は虚彈さえも畏れていた」
飛蓬のように去って已まず
客の思いは深まるばかり
わが壯志は時と與に歇き
人生は事に隨って過ぎて行く」
生涯の縮んでゆくのを悲しみつつ
數刻の餘された歡みを念ふ
雲は隴坻山の黒々とした所に生じ
桑は薊北の寒きあたりに疎に生えている」
鳥の通う道には蹊徑は無く
清らかな漢水には波瀾が有る
あなたが羽翮の仙に化しているのではないかと思ふ

どうか私に金丹を錬ってはくださらぬか

［嗣宗窮途、楊朱歧路］「嗣宗」は、阮籍の字。『晉書』阮籍傳に「時に意に率ひて獨り駕し、徑路に由らず。車跡の窮する所、輒ち慟哭して返る」とある。阮籍は行き止まりになった途を前にして泣いた。「楊朱歧路」は、『列子』説符の「多岐亡羊」の話に拠る。楊朱は多岐を前にして、自分の進むべき路がわからなくなって悩んだ。

［舒慘殊方］『芸文類聚』巻三〇は「舒慘」を「南北」に作る。「南と北に方を殊にす」

［攝衛］攝養保衛。養生すること。

［敬承款曲］うち解けた話を伺った、ということか。

［猶依杜陵之水、尚保池陽之田］「杜陵」「池陽」は、實際の地名ではなく、周弘讓の隱棲している場所をいうのであろう。「池陽」を『類聚』は「東陂」に作る。

［鏟迹幽蹊、銷聲穹谷］弘讓の隱棲の様子を推測して言うのであろう。

［九仙之方］あらゆる仙人たちの藥方。

［五嶽之舉］五嶽に行くこと。

［同夫關令、物色異人］「關令」は、関所で老子の來るのを待っていたという關令尹喜のこと。

［譬彼客卿、服膺高士］「客卿」は、他國から來て卿相となった人。そのような人でありながら「高士」（在野の隱君子）を慕っている、という意味であろうが、踏まえる故事は未詳。或いは王褒自身のことか。

［上經説道、屢聽玄牝之談］「上經」は、『老子』のことであろう。「玄牝」とは、萬物を生ずる道。『老子』六に「谷神 死せず、是を玄牝と謂ふ。玄牝の門、是を天地の根と謂ふ」と。

［中藥養神、每稟丹沙之説］「中藥」は、中等の藥。嵇康の「養生論」に「神農曰く、上藥は命を養ひ、中藥は性を養ふ者なり」とある。「丹沙之説」は、「丹沙」の効用、使用法。「丹沙」は、仙藥の一種。

［頃年事遒盡］「年事」は、年齢、年齒。「遒盡」は、盡きてしまうこと。『楚辭』宋玉「九辯」に「歲は忽忽として遒り盡き、余が壽の將からざらんことを恐る」とある。

［視陰愒日、猶趙孟之徂年］『左氏傳』昭公元年に「趙孟は蔭を視て曰く、朝夕 相及ばず。誰か能く五（年）を待たんと。后子 出でて人に告げて曰く、趙孟は將に死せんとす。民に主として、歲を翫り日を愒る。其れ幾何かあらんと」と。

［負杖行吟、同劉琨之積慘］「劉琨」は、西晉末の人。「盧諶に答うる書」に「終身の積慘を排し、數刻の暫歡を求む」とある。「積慘」は、積もれる憂い。

［河陽北臨、空思鞏縣、霸陵南望、還見長安］「河陽で北に向かえば、空しく鞏縣が思われるし、霸陵において南を望めば、なお長安が見えるばかり」何を言おうとしているのか、よくわからない。どちらを向いてもここは周の土地、ということか。

［射聲之鬼］「射聲」は、射聲校尉の略で、王褒自身のことをいうが、なぜ「射聲」というのか未詳。帝の側近の

官を言うか。「鬼」は靈魂。

［龍鍾横集］「龍鍾」は、涙を流すこと。涙が溢れる。

【訳】

初め褒は梁の處士である汝南の周弘讓と仲が善かった。弘讓の兄の弘正が陳から來聘すると、高祖は褒らに親知の人に音問を通ずることを許した。褒は弘讓に詩を贈り、并せて書を送って次のように言った。

阮嗣宗には窮途があり、楊朱には歧路があった。轉蓬はどこまでも長く逝き、流れる水は歸ってはこない。江南での舒びやかな暮らしと北地での慘めな暮らしを過ごし、炎さと涼さと異なる季節を送った。こちらでは木の皮は春になっても厚く、桂の樹は冬に花を咲かせる。養生に努めて、行いに豫びの多い日々を送りたいと願っている。

賢兄がこちらに來られ、敬んで打ち解けたお話を承りましたが、あなたは今も猶杜陵の水辺に依り、尚も池陽の田を保って、足迹を幽蹊に鏟し、聲を穹谷に銷けこませておられるとのこと。何と愉樂そうなことか。幸甚。幸甚。

弟は以前から疾がちなため、亟ば多くの仙人の藥方を覽てきた。晩年になり世俗の途に関わるようになったが、五嶽に行きたいという思いを常に懷いている。あの關令尹喜と同じように、異人を物色し、譬へば客卿でありながら、高士に服膺しているように。上經の説教の際には、屢ば玄牝の談を聽き、中藥によって精神を養い、毎に丹沙の説を稟けてきた。この頃は歳を重ねて、容姿頭髪は衰えてしまった。ぼさぼさに生えて黄ばんでしまい、零落するのも間もなくのことだろう。

振り返って吾が生涯を念ふに、繁き憂いが總て集まってくる。陰を視日を愒ることは、猶お趙孟が死に近付いて行くがごとく、杖を負んで行く吟ずることは、劉琨の積もれる慘に同じだ。河陽から北に臨めば、空しく鞏縣が思われ、霸陵から南を望めば、なお長安が見えるばかり。冀わくは書生としての魂の、來りて舊の壤に依り、射聲の鬼の、他鄉において恨みを抱くことの無いようでありたい。

白雲が天に在るように、長く離別してしまった。會える日は、邈として何時のことか。筆を援って紙を攬れば、涙が溢れてくる。

(9) 周弘讓からの復書

弘讓復書曰、

甚矣悲哉。此之爲別也。雲飛泥沈、金鑠蘭滅。玉音不嗣、瑤華莫因。家兄至自鎬京、致書於穹谷。故人之跡、有如對面。開題申紙、流臉沾膝。

江南燠熱、橘柚冬青、渭北沍寒、楊楡晩葉。土風氣候、各集所安。餐衛適時、寢興多福。甚善、甚善。

與弟分袂西陝、言反東區。雖保周陵、還依蔣徑、三姜

離析、二仲不歸。麋鹿爲曹、更多悲緒。丹經在握、貧病莫諧、芝朮可求、恆爲採掇。
昔吾壯日、及弟富年。俱値邕熙、並歡衡泌。南風雅操、清商妙曲、絃琴促坐、無乏夕晨。玉瀝金華、冀獲難老。不虞一旦、翻覆波瀾。吾已愒陰、弟非茂齒。禽尚之契、各在天涯。永念生平、難爲胸臆。且當視陰數箭、排愁破涕。人生樂耳、憂戚何爲。豈能遽悲次房、遊魂不反。遠傷金彦、骸柩無託。但願愛玉體、珍金相、保期頤、享黄髮。
猶冀蒼雁頳鯉、時傳尺素、清風朗月、俱寄相思。子淵、子淵、長爲別矣。握管操觚、聲涙俱咽。
尋出爲宜州刺史、卒於位。時年六十四。子肅嗣。

弘讓 書を復して曰く、
甚だし矣 悲しい哉。此の別れ爲るや。雲のごとく飛び 泥のごとく沈み、金は鑠け蘭は滅す。玉音 嗣がず、瑤華 因る莫し。家兄 鎬京より至り、書を穹谷に致す。故人の跡、對面するが如き有り。題を開き紙を申ぶるに、流臉 膝を沾す。
江南は燠熱にして、橘柚 冬にもなほ青きに、渭北は沍寒、楊楡は晩葉ならん。土風 氣候、各の安んずる所に集まり、餐衛 時に適ひ、寢興 多福なりと。甚だ善し、甚だ善し。
弟と袂を西陝に分ちて、言に東區に反る。周陵を保ち、還ほ蔣徑に依ると雖も、三姜 離析し、二仲 歸らず。麋鹿を曹と爲すも、更に悲緒多し。丹經 握に在るも、貧病なれば諧ふ莫く、芝朮 求む可くして、恆に採掇を爲す。
昔 吾が壯なりし日、弟も富年なり。俱に邕熙に値ひ、並びに衡泌を歡ぶ。南風の雅操、清商の妙曲、絃琴坐を促し、夕晨に乏しきこと無し。玉瀝金華もて、老い難きを獲んことを冀ふ。
虞はざりき 一旦にして、翻覆 波瀾あらんとは。吾は已に陰を愒み、弟も茂齒に非ず。禽 尚の契り、各の天涯に在り。永く生平を念へば、胸臆を爲し難し。且つ當に陰を視ること數箭なるべし、愁ひを排し涕を破てん。
人生は樂しまん耳、憂戚して何をか爲さん。豈に能く遽かに次房を悲しむも、遊魂は反らず。遠く金彦を傷むも、骸柩 託する無し。但だ願はくは玉體を愛し、金相を珍とし、期頤を保ち、黄髮を享けんことを。
猶ほ冀ふ 蒼雁 頳鯉もて、時に尺素を傳へ、清風 朗月、俱に相思を寄せんことを。子淵、子淵、長く別れを爲さん矣。管を握り觚を操り、聲涙 俱に咽ぶ。
尋で出でて宜州刺史と爲り、位に卒す。時に年六十四なり。子の肅嗣ぐ。

【語釈】
「鎬京」長安のこと。
「分袂西陝、言反東區」「西陝」長安で「袂を分」かったのは、兄の周弘正。「東區」は、江南を指す。

［雖保周陵、還依蔣徑］「周陵」は、北周の土地。それを「保つ」とは、周に仕えていることをいうのであろう。『類聚』は「周陵」を「周陂」に作る。「蔣徑」は、漢の蔣詡の「三徑」の故事を踏まえる。「還依蔣徑」は、隱棲を願っていることをいう。

［三姜離析、二仲不歸］「三姜」は、後漢の姜肱と弟の仲海、季江で、兄弟の仲が好かった。『後漢書』姜肱傳に、兄弟三人の友愛の事を記す。「離析」は、別離すること。「二仲」は、漢の隱士 羊仲、求仲のこと。『三輔決錄』に「蔣詡の舍中に三徑あり、惟だ羊仲、求仲とのみ、之に從ひて游ぶ」とある。「二仲不歸」は、王褒が歸って来ないことをいう。

［丹經］仙藥の書。

［芝朮］仙人になるための食べ物。芝と朮。

［俱値邕熙、並歡衡泌］「邕熙」は、和らぎ伸びやかな狀態。「衡泌」は、衡門の下と泉水のほとり。隱居の地をいう。『毛詩』陳風「衡門」に「衡門の下、以て棲遲す可し。泌の洋々たる、以て樂飢す可し」と。

［南風雅操、清商妙曲］江南の雅やかな音樂と、清んだ商の音階の妙曲。

［絃琴促坐］琴の音色にひかれて、膝を詰めて坐る。

［無乏夕晨］「夕」字、『周書』は「名」に作るも、『冊府』巻九〇五は「昏」、『類聚』巻三〇は「夕」に作る。「名」は誤りであろうが、「昏」「夕」のいずれが是であるか未定。今は仮に「夕」としておく。朝夕の樂しみに欠くことが無かった。

［玉瀝金華］玉からの瀝りと、金に咲いた華。仙人の食べ物。

［吾已愒陰、弟非茂齒］「愒陰」は、生を盗むようにして生きている。「非茂齒」は、今や若くはないこと。

［禽尚之契、各在天涯］「禽尚之契」は未詳。禽と尚の契りも適わず、各々天涯に別れ別れになっている。

［豈能遽悲次房、遊魂不反］「次房」は、後漢の温序の字。温序は、隗囂の別將 苟宇に捕えられ、降伏を勧められたが拒否し、劍を受けて自害した。『後漢書』獨行、温序傳。

［遠傷金彦、骸柩無託］王忳は京師へ行く途中、行き倒れになった書生、名は金彦を看取って葬ってやった。後に、どこからともなくやってきた馬の導きによって書生の親に出會って感謝され、そのことから世に名を知られたという。『後漢書』獨行、王忳傳。

［但願愛玉體、珍金相］「相」字、『周書』は「箱」に作るも、『類聚』巻三〇に従う。どうぞ御体を大切に。

［保期頤、享黃髮］「期頤」は、百歳の人のこと。『禮記』曲禮上に「百年曰期、頤（百年を期と曰ふ、頤ふなり）と。「黃髮」は、老人の髪をいう。

［猶冀蒼雁頳鯉］「雁」字、『周書』は「膺」に作るも、『類聚』巻三〇に従う。「蒼雁 頳鯉」は、手紙のこと。雁や鯉に託して書信を届ける。

【訳】

弘讓が返書を認めて言うには、

甚だしいことだ この悲しみは。此の別れというものは、雲のごとく飛び 泥のごとく沈み、その悲しみに金さえも鑠け蘭さえも枯れてしまうだろう。玉のごとき音も途切れてしまい、瑤の華のごとき便りも届かなくなった。家兄が鎬京から歸り、手紙を穹谷に届けてくれた。友の筆跡を見て、對面しているような思いだった。書面を開き紙を伸べると、流れる涙は膝を沾した。

江南は炎熱の天氣で、橘柚は冬でもなほ青々と茂っているが、渭北の地は寒冷で、楊や榆の葉は枯れ落ちていることだろう。風土 氣候により、人はそれぞれ安んずる所に集まって暮らすもの。飲食など 時に適ったものをとって、起居 多福ならんことを。甚だ善し、甚だ善し。

（兄は）あなたと袂を西陝に分ち、言に江南に反ってきた。あなたは周に仕えていても、還お隱棲を願って蔣徑に依っているとか。しかし「三姜」は離ればなれになってしまい、「二仲」は歸ってこない。麋鹿を曹として暮らしていても、更に悲しみが増してくる。

丹經は手中に在るが、貧と病のために調えることはできない。しかし芝朮は求めることは可能で、私は恆に採掇をしている。

その昔 私が元氣であった日、あなたも同じように若かった。俱に伸びやかに暮らし、並びに閑居を歡んでいた。江南の雅やかな音樂と、清んだ商調の妙なる曲。琴の音色に膝を詰めて坐り、夕べも晨も満ち足りないことはなかった。玉の瀝 金の華によって、いつまでも老い難くありたいと願っていた。

ところが豈に謀らんや 一旦にして、世は翻覆して波瀾が起ころうとは。私は既に陰を惕んでいるような狀態、そなたも歳をとっておられた。それまで禽と尚のごとき契りを交わしていたが、今や各の天の一涯に在る。これまでの生平を念えば、胸の内は耐えきれなくなる。且つまた殘された時間は あと僅か、愁いを排しのけて涕を棄てることにしよう。

人生は樂しまなければならない、憂い戚しんで何になろうか。どうしてまた遽かに次房を悲しんだところで、遊魂は反ってはこないし、遙かに金彦を傷んでも、骸柩を託することもできはしない。但だ願わくは玉體を愛し、金相を大切にして、百年の歳を保ち、黄髪を享けられんことを。

猶お冀わくは 蒼雁 頼鯉に託して、時に尺素を傳へ、清風 朗月の折りには、俱に相思の情を寄せんことを。子淵よ、子淵よ、これで長の別れとなることだろう。管を握り觚を手に操れば、聲涙 俱に流れて咽んでしまうことだ。

尋で出でて宜州刺史と爲り、在任中に亡くなった。時に年は六十四。子の肅が後を嗣いだ。

【参考】

『北史』—王褒傳—

（一）

王褒字子深、琅邪臨沂人也。曾祖儉、祖騫、父規、並南史有傳。

褒識量淹通、志懷沈靜。美威儀、善談笑。博覽史傳、七歲能屬文。外祖梁司空袁昂愛之、謂賓客曰、「此兒當成吾宅相。」弱冠舉秀才、除祕書郎、太子舍人。

梁國子祭酒蕭子雲、褒之姑夫也。特善草隸。褒少以姻戚、去來其家、遂相模範、而名亞子雲、並見重於時。武帝嘉其才藝、遂以弟鄱陽王恢女妻之。襲爵南昌縣侯、歷位祕書丞、宣城王文學、安城内史。及侯景陷建鄴、褒輯寧所部、見稱於時。轉南平内史。

王褒、字は子深。琅邪は臨沂の人なり。曾祖は儉、祖は騫、父は規、並びに『南史』に傳有り。

褒は識量 淹通にして、志懷 沈靜。美しき威儀あり、談笑を善くす。博く史傳を覽、七歲にして能く文を屬る。外祖なる梁の司空袁昂は之を愛し、賓客に謂ひて曰く「此の兒 當に吾が宅相を成すべし」と。弱冠にして秀才に舉げられ、祕書郎、太子舍人に除せらる。

梁の國子祭酒蕭子雲は、褒の姑夫なり。特に草隸を善くす。褒は少なるとき姻戚なるを以て、其の家に去來し、遂に相 模範とし、而して名は子雲に亞ぎ、並びに時に重んぜらる。武帝は其の才藝を嘉し、遂て弟 鄱陽王恢の女を以て之に妻す。爵を南昌縣侯に襲ぎ、祕書丞、宣城王の文學、安城内史を歷位す。侯景 建鄴を陷すに及び、褒は部する所を輯め寧んじて、時に稱せらる。南平内史に轉ず。

（二）

梁元帝嗣位、舊有舊。召拜吏部尚書、右僕射、仍遷左丞、兼參掌。褒既名家、文學優贍、當時咸共推挹。故位望隆重、寵遇日甚、而愈自謙損、不以位地矜物、時論稱之。

初元帝平侯景、及禽武陵王紀後、以建鄴凋殘、時江陵殷盛、便欲安之。又其政府臣僚皆楚人也、並願即都鄢郢。嘗召羣臣議之。鎮軍將軍胡僧祐、吏部尚書宗懍、太府卿黃羅漢、御史中丞劉毅等曰、「建鄴王氣已盡、又荊南之地有天子氣。遷徙非宜。」元帝深以為然。褒性謹慎、知元帝多猜忌、弗敢公言其非。

後因清閑、密諫、言辭甚切。元帝意好荊楚、已從僧祐等策、竟不用。

梁の元帝 位を嗣ぐや、舊より舊有り。召して吏部尚書、右僕射を拜し、仍りて左丞、兼參掌に遷る。褒は既に名家にして、文學は優贍なれば、當時 咸な共に推挹す。故より位望 隆重なれば、寵遇は日に甚し。而れども愈よ自ら謙損にして、位地を以て物に矜らざれば、時論 之を

稱す。

初め元帝は侯景を平げ、及び武陵王紀を禽へし後、建鄴の凋殘し、時に江陵の殷盛なるを以て、便ち之に安んぜんと欲す。又た其の政府の臣僚は皆な楚人なれば、並びに即ち鄖郢に都せんことを願ふ。嘗て羣臣を召して之を議す。鎮軍將軍の胡僧祐、吏部尚書の宗懍、太府卿の黃羅漢、御史中丞の劉毅ら曰く、

「建鄴の王氣は已に盡き、又た荊南の地に天子の氣有り。遷徙するは宜しきに非ず」と。

元帝は深く以て然りと爲す。褒は性 謹愼にして、元帝の猜忌多きを知れば、敢へて其の非を公言せず。

後に清閑に因りて、密かに諫め、言辭は甚だ切なり。元帝の意は荊楚を好み、已に僧祐らの策に從へば、竟に用ひず。

(三)

及魏征江陵、元帝授褒都督城西諸軍事。柵破、從元帝入金城。俄而元帝出降、褒遂與衆出、見柱國于謹、甚禮之。褒曾作燕歌、妙盡塞北寒苦之狀、元帝及諸文士並和之、而競爲悽切之辭、至此方驗焉。

褒與王克、劉毅、宗懍、殷不害等數十人、俱至長安。

周文喜曰、

「昔平吳之利、二陸而已。今定楚之功、羣賢畢至、可謂過之矣。」

又謂褒及王克曰、

「吾即王氏甥也、卿等並吾之舅氏。當以親戚爲情、勿以去鄉介意。」

於是授褒及殷不害等車騎大將軍、儀同三司。常從容上席、資餼甚厚。褒等亦並荷恩眄、忘羈旅焉。

魏 江陵を征するに及び、元帝は褒に都督城西諸軍事を授く。柵 破れ、元帝に從ひて金城に入る。俄かにして元帝は出でて降り、褒は遂に衆と出で、柱國于謹に見ひ、甚だ之に禮せらる。褒 曾て「燕歌」を作り、妙に塞北寒苦の狀を盡し、元帝 及び諸文士 並びに之に和して、競ひて悽切の辭を爲す。此に至りて方に驗あり。

褒は王克、劉毅、宗懍、殷不害ら數十人と、俱に長安に至る。周文 喜びて曰く、

「昔 吳を平らぐるの利は、二陸（陸機、陸雲）なるのみ。今 楚を定むるの功は、羣賢 畢く至り、之に過ぎたりと謂ふ可し」と。

又た褒及び王克に謂ひて曰く、

「吾は即ち王氏の甥なれば、卿らは並びに吾の舅氏なり。當に親戚を以て情と爲し、鄉を去るを以て意に介する勿れ」と。

是に於て褒及び殷不害に車騎大將軍、儀同三司を授く。常に上席に從容され、資餼 甚だ厚し。褒らも亦た並びに恩眄を荷ひ、羈旅を忘る。

(四)

周孝閔帝踐阼、封石泉縣子。明帝即位、篤好文學。時褒與庾信才名最高、特加親待。帝每遊宴、命褒賦詩談論、恒在左右。尋加開府儀同三司。保定中、除内史中大夫。武帝作象經、令褒注之。引據該洽、甚見稱賞。

褒有器局、雅識政體。既累世在江東爲宰輔、帝亦以此重之。建德以後、頗參朝議、凡大詔冊、皆令褒具草。東宮既建、授太子少保、遷少司空、仍掌綸誥。乘輿行幸、褒常侍從。

初褒與梁處士汝南周弘讓相善。及讓兄弘正自陳來聘、帝許褒等通親知音問。褒贈弘讓詩并書焉。尋出爲宜州刺史、卒於位。子甬。

周の孝閔帝 踐阼するや、石泉縣子に封ぜらる。明帝即位するや、篤く文學を好む。時に褒は庾信と才名 最も高く、特に親待を加へらる。帝は遊宴の毎に、褒に命じて詩を賦し談論せしめ、恒に左右に在り。尋で開府儀同三司を加へらる。保定中、内史中大夫に除せらる。武帝は『象經』を作り、褒をして之に注せしむ。引據 該洽なれば、甚だ稱賞さる。

褒に器局有り、雅り政體を識る。既に世を累ねて江東に在りて宰輔爲れば、帝は亦た此を以て之を重んず。建德以後、頗る朝議に參り、凡そ大詔冊あれば、皆な褒をして具草せしむ。東宮 既に建つや、太子少保を授けられ、少司空に遷り、仍りて綸誥を掌る。乘輿の行幸には、褒は常に侍從す。

初め褒は梁の處士 汝南の周弘讓と相善し。讓の兄弘正陳より來聘するに及び、帝は褒らに親知に音問を通ずるを許す。褒は弘讓に詩 并びに書を贈る。尋で出でて宜州刺史と爲り、位に卒す。子は甬。